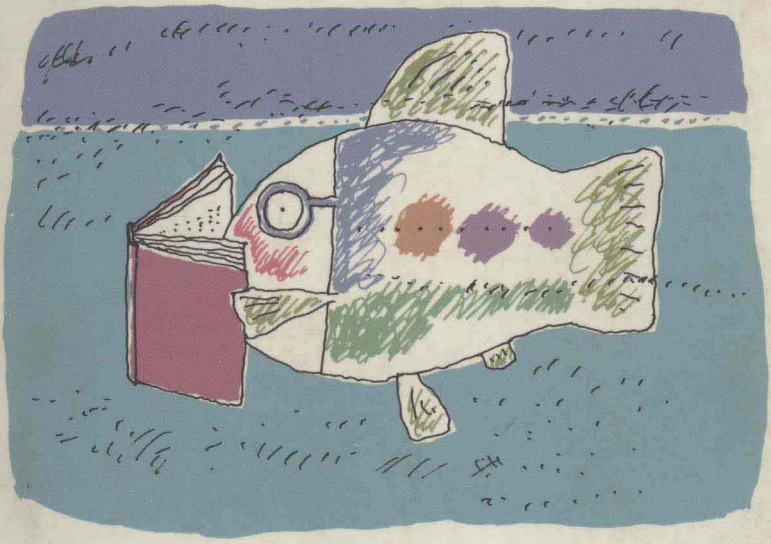
書物交遊録

本を読む 人を読む

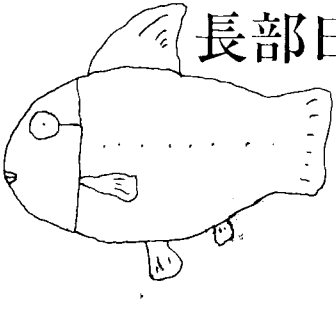
長部日出雄



書物交遊録

本を読む 人を読む

長部日出雄



長部　日出雄（おさべ　ひでを）

略歴　1934（昭和9）年，青森県弘前市生まれ。早稲田大学文学部中退。週刊誌記者，ＰＲ編集者，ルポライター，ＴＶドキュメンタリー構成者，映画評論などの仕事を経て，小説を書きはじめる。『津軽世去れ節』『津軽じょんから節』で第69回直木賞，『鬼が来た　棟方志功伝』で昭和54年度芸術選奨。

著書　『津軽世去れ節』（津軽書房・角川文庫）『鬼が来た　棟方志功伝』（文藝春秋）『津軽から飛んだ』（筑摩書房）『消えた城塞』『風雪平野』（角川書店）『笑いの狩人』（実業之日本社）『禁酒安兵衛』（講談社）『わが名は新門辰五郎』（新潮社）『源義経』（学研）など。

書物交遊録　本を読む　人を読む
昭和五十七年三月四日　第一刷発行
著者　長部日出雄
発行者　江口克彦
発行所　PHP研究所
京都市南区西九条北ノ内町一一　郵便番号六〇一
電話　〇七五―六八一―四四三一
東京事務所　〇三―二九五―九二一一
印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　株式会社　大進堂
©Hideo Osabe 1982 Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えさせていただきます。

書物交遊録／目次

本を読む　人を読む

吉行淳之介

吉行淳之介と娼婦の街　9　『夕暮まで』　21　やさしさの核心『軽薄対談』　25　精神を活性化させる『恐怖・恐怖対談』　31　スナップショット　35

野坂昭如

無気味な黙示録『錬姦作法』　37　怪魚と雑魚の群れ『新宿海溝』　44　イタコと締切（デッドライン）『水虫魂』　46　トリックスターと野坂昭如　53

田中小実昌

稀有の感覚『乙女島のおとめ』　59

色川武大

色川武大の登場――阿佐田哲也賛江　67

五木寛之

スイングする文体『風に吹かれて』　79

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

井上ひさし
パロディの力（ダイナミックス）学『青葉繁れる』 87
赤瀬川原平
黒いユーモア『追放された野次馬　思想的変質者の十字路』 97
小林信彦
下町学のアリストテレス『夢の街　その他の街』 101
筒井康隆
創造する宇宙『将軍が目醒めた時』 113
佐藤愛子
爽快なユーモア『坊主の花かんざし』 121
田辺聖子
ユーモアの精神（スピリット）『夕どはんたべた？』 131

後藤明生
反時代的な作家の〈何故?〉『四十歳のオブローモフ』 139
高井有一
内部に固執するものを持つ眼『北の河』 153
もうひとつの抵抗『遠い日の海』 162
野呂邦暢
必死の通信『丘の火』 175
水上勉
夜更けの印象 181
暗い穴『水上勉全集』第一巻を読んで 185
葛西善蔵
葛西善蔵と私 189
石坂洋次郎
『わが日わが夢』 193

山口　瞳
内側からの根底的な批評『人殺し』　195
木山捷平
木山さんの磁力　207
宮下湯の煙は北へなびく『酔いざめ日記』　217
内田百閒
遠回りの文学　219
観客席と現実のあいだ
〈読書と私〉　231
あとがき

書物交遊録

本を読む　人を読む

装幀／和田　誠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

吉行淳之介——よしゆき　じゅんのすけ

吉行淳之介と娼婦の街

吉行さんと娼婦、というテーマで、すぐにおもいだすのは、八年ほどまえ生島治郎氏と三人でバンコクへ行ったときのことだ。それも、食い物のことから話を始めなければならない。

あれはバンコクに着いてから何日目のことだったのだろうか、わたしたちは昼食のために、ミラマーという中華料理店へ行った。吉行さんはここの料理が、すこぶる気に入ったらしい。吉行さんはときに自ら、少食である、と称することがあり、また一見いかにも蒲柳の質のようにも見えるから、それを信じる方も多いかも知れないが、わたしには疑問がある。

——蒲柳というのは、蒲焼きと柳川の略なのではないだろうか……。

吉行さんはそうおもわれるほどの健啖家ぶりを発揮し、胃袋がポコンと膨れ上がるまで大量の料理を平らげたあと、ウエイターを呼んで“Very good”と頷き、以来、帰国するまで数日のあ

いだ、食事のたびにその店へ通い続けたのである。その店の料理は確かに旨かったが、わたしは少しく奇異の念を抱いた。

バンコクには、ミラマーのほかにも何軒かの有名中華料理店があることを旅行案内書は教えており、そのうちの一軒は「最も格調が高い」と説明されている。たとえミラマーの料理がいかに旨かったにせよ、いや、旨かったとすればそれだけ、

——では、ほかの店の味はどんなだろう。

と考えるのが、通常の人間の心理なのではあるまいか。ところが、吉行さんは一軒の店の料理が自分の好みに合う、となると、もうほかの店には見向きもしないのだ。

いまにしておもえば、その店の料理の味わいばかりではなく、壁と天井が油光りしているような古びた店内の光線や空気の具合、周囲の客の服装と雰囲気、それにウェイターの接待ぶりなどが、複雑にしてかつ単純な吉行さんの好みに、ぴたりと合致していたのかもしれない。しかし、そのときのわたしは、ミラマー以外の店には足を向けようともしない吉行さんを、

——少少怠け者なのではないかな……。

と感じたりもした。

食物に対する好奇心が乏しい、とはおもえなかった。いちど、わたしが見つけ出してきたマーケットの近くにある露店のソバ屋へ誘ったところ、決して清潔とはいいがたいその屋台のソバを、吉行さんは平気で啜りこんだ。たしかあのときは「旨い、旨い」といって、おかわりまでし

た筈である。こういうときの吉行さんの神経は、世評とはちがって、まったく繊細であるとはおもえない。吉行さん自身、小さいころは食物に対する好き嫌いが激しかったのに、

……現在はどうかというと、何でも食べることができる。まったく見ごとなくらい、いかなるものでも食べることができるのである。(『なんのせいか』)

と書いておられる。そして、松茸のフライの裏側に油虫がへばりついていたときは、油虫を剝がして松茸だけ食べてもいいくらいの心持で、事実、ブランデーグラスの底に蠅の死骸が沈んでいたときには、蠅をつまみ出してブランデーを飲んでしまったことがあり、それはなんのせいかというと、「赤線のおかげ」と言いたい、という。

話はこのへんから赤線の方向へ進みそうになるのだが、もうすこし食い物の話を続けたい。

バンコクで吉行さんは、果物の王様と呼ばれているドリアンに取憑かれたようになった。これはまさに、取憑かれた、としかほかにいいようがない。このドリアンなるものが、いかなる果物かというと、のちにわたしは新宿の伊勢丹の地下で、これが「悪魔の果実」というキャッチフレーズで売られているのを発見し、うまいことをいう、と感心したのだが、ラグビーのボール状の外皮は見るからに禍禍(まがまが)しい棘棘で覆われ、それを裁ち割ると、なかから濃厚にして強烈なる人糞に似たにおいが発散するのだ。タイの人たちには、なにかを質に置いても……といわれるほど珍重されている果物だが、初めての人間にはなかなか食える代物ではない、とされている。

わたしはいちど酒乱になりかけたとき、吉行さんにこのドリアンの果肉を口のなかに詰めこま

れ、いっぺんに酔いが醒めてしまった。吉行さんとおなじように複雑にして単純な嗜好の持主である生島氏は、最初の一片で眉を顰め、二度と口にしようとはしなかった。

吉行さんは、この糞臭を放つ悪魔の果実を、たちまち愛好し始めたのである。マーケットの露店で地元の人と一緒に食べるばかりでなく、路上の物売りから買い求めたドリアンを、ホテルの部屋のなかに持込み、暮夜ひそかに貪(むさぼ)っておられた様子であった。だから、わたしたちが泊っていたのは、バンコクでも最も格式の高いヨーロッパ風のホテルだったのだが、吉行さんの部屋のまえの廊下には、いつも汲取り式の便所のような臭気が漂っていた。

昼のあいだ、吉行さんはめったに部屋を出ることがなかった。生島氏とわたしが、「お寺でも見物に行きませんか」と誘いに行くと、「きみたちは東京にいて、泉岳寺に行ったことがあるかね」と反問し、「ありません」と答えると、「では、なにもわざわざバンコクまで来て、お寺を見物しに行くこともあるまい」といい、西洋の漫画に出て来る囚人のような縞模様のパジャマを着て、終日ホテルの部屋に閉じ籠もっておられるのである。

といっても肩肘張って、観光を拒否している、という感じではなく、いったん好きとなったら、ミラマーのほかの料理店へは行かず、糞臭のあるドリアンに没頭するのとおなじように、どこにいてもごく自然に自分の好みを変えずにいる、ということのようだった。

やがて吉行さんと生島氏は、毎日のように午後の時間をコイコイで過ごしはじめた。厚いカーテンを閉めきった薄暗いホテルの部屋のなかで、絨毯に胡坐をかいてコイコイに熱中している二

人の姿を見て、博奕に興味のないわたしは、

——これでは東京にいるのと、おなじことではないか……。

とおもいながら、夜になるのを待っていた。

夜になると、三人は連れ立って街に出かけた。行先はキャバレーだった。バンコクのキャバレーは、待合室にいる沢山のホステスを小さな窓から覗いて、自分の相手を選ぶ仕組みになっていたので、各人の女性に対する好みが、歴然と読みとれることになる。

吉行さんが選ぶタイプは、たいてい決まっていた。顔は狆くしゃ、体つきは小柄で、やや発育不全というか、どことなく畸型的な感じのする女のひとである。この点で、吉行さんの好みは（生意気なようだが）単純といってもいいようにおもわれる。しかし、どうしてそのような女の人を選ぶのか、その動機は単純なものではあるまい。まえに吉行さんの好みを、複雑にしてかつ単純な……と書いたのは、このあたりの事情からである。

セックスを文学の主題として選びながら、吉行さんが現実に選ぶのは、かならずしも肉感的な女性ではない。ここで早くも理屈をいわせてもらうと、われわれ人間はいつか容貌や肉体において理想のかたちに近づけるかも知れないが、精神だけは決して完全なものではあり得ないとすれば、吉行さんはそうした人間の精神（の不完全さ）が、そのまま容貌や体型にあらわれているような女性を好んでおられるようにおもわれた。

また巷間では、吉行さんが女性のお尻か背中をひと撫ですれば、相手はたちまち重心を失って

しなだれかかってくる……というふうにもいわれているけれども、そのことに対する疑問も、ここで呈示しておかなければならない。

当時バンコクでは、日本人の男がふられることはあり得ない、といわれていた。それはたぶん日本人相手の店でだけ通用することだったのだろう。なぜなら、バンコクにいたあいだ申込んだ女性にことごとく拒絶されたわたしばかりでなく、吉行さんと生島氏の二人も、タイ人だけを客とする店では、物の見事に肘鉄を食ったからである。

吉行さんをふった女性が、どんなひとであるのかをわたしは知っていた。わたしはその店の一人のホステスに惚れてしまい、連日、店が扉を開く早早の時間から通いつめていたので、その女のひとが開店前にホステス全員を集めて点呼をとり、訓示を与える役目をしていて、言わば学校の先生のような精神的なタイプであることを知っていたのだ。

ホステスたちがいる待合室の窓から覗き込んで、吉行さんが選んだのは、その学校の先生だった。吉行さんとしては、そうした精神的なタイプを口説くことで、彼女に肉体の所在を知らしめようとしたのかもしれない。結果として吉行さんの申し出は、「メダイカ！」（駄目よッ）と、きびしく拒否されたのだった。

吉行さんが小説家になったことを（いずれそのほかの道は閉ざされていたであろうが）わたしは本当によかったとおもう。なにしろ学校の先生のようなタイプも好きなのだ。もし、女子大の先生にでもなっていたら……とおもうと、慄然とせざるを得ないのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.